

## アジアサイエンスパーク協会（ASPA）の結成

1. アジアのサイエンスパークとの交流
2. アジアに広がるサイエンスパーク運動
3. 工場誘致から自力創業へ—増えるインキュベーター
4. 産業クラスター形成に発展
5. 明確な「科学教育立国」の戦略
6. イノベーションシステムの構築へ

### 1. アジアのサイエンスパークとの交流

サイエンスパークもインキュベーターも、日本では生まれて日の浅い事業であり、当然、共通の問題や課題があることも事実で、情報交流、経験交流がきわめて有効です。従ってそのためのネットワーク化を図ることは重要な課題であり、KSPでも国内の13のサイエンスパークとのネットワーク（Japan Science Park Association=JASPA）を創ったほかに、長洲さんの意を受け、民際外交の精神を具体化するため、韓国の二つのテクノパーク（京畿、大邱）、中国の二つ高新技术産業開発区（瀋陽、大連）との間で友好提携の協定を結び、積極的な交流活動を行ってきました。内外からの見学者も多く、私の在任中だけでも国内から三万人、海外から三七〇〇人、KSPを会場とする各種イベントへの参加者は六四万五〇〇〇人を数えました。海外からの見学者は世界中から見えました、とくに韓国、中国、台湾、タイ、マレーシアなどアジア諸国からのお客さんが目立ちました。韓国には講師を頼まれて何度も出かけました。アジアからの見学者が多いこと、アジアとの交流が盛んになることを長洲さんはとても喜んでくれました。

こうした交流の蓄積のなかから、一九九七年十二月、KSPの呼びかけで、KSPを会場に日本、中国、韓国、台湾の八サイエンスパークの代表が集まり、「東アジア・サイエンスパーク交流会議」が開かれました。これを受けて、翌年韓国で開かれた第二回会議で「東アジア・サイエンスパーク協会」が正式に結成され、翌九九年には台湾の新竹で第三回、〇〇年九月には中国瀋陽で第四回会議が開かれました。回を重ねるにつれて、参加者が増え、第四回会議では日本、中国、韓国、台湾のほか、ASEAN諸国、アメリカ、カナダ、オーストラリア、さらにEUや北欧諸国など二三カ国・地域のサイエンスパークやインキュベーターの代表、大學や国、地方の政府関係者などが参加しました。この会議で常設事務局の設置や、将来の北朝鮮、インド、極東ロシアなどの参加も視野に入れて「アジアサイエンスパーク協会」への発展的改組も決定され、私が初代会長に選ばれました。その後、第五回京都、第六回韓国テグ（ここで会長を韓国と交代、私は名誉会長に推される）、第七回台湾新竹を経て、〇四年は第八回大会が中国の山東省威海市で開かれました（〇五年の第九回大会は十一月にKSPで開催の予定）。

### 2. アジアに広がるサイエンスパーク運動

さて、これまでの会議で強く感じたことは、第一にサイエンスパーク（中国では高技術産業開発区、単体を指す場合は科技园という。韓国はテクノパーク、台湾は科学工業園区という）＝科学技術の産業化のための知的創造拠点づくりの運動が、今やアジア全域に広がってきたことで、七〇年代から始まった東アジアの工業化が新しい段階に進みつつあることを示しています。IT革命の浸透や知識経済時代への移行が、アジアの経済と社会全体に大きなインパクトを与えつつあることがわかりました。

こうした東アジアにおけるサイエンスパーク活動の発展に、KSPモデルが一定の貢献をしてきたこと、また、KSPの提唱による交流会議の開催とアジアサイエンスパーク協会の設立が、揺籃期にある東アジアのサイエンスパーク運動の発展を加速する効果をもったのではないかと私は考えています。〇二年のテグでの大会終了後訪問した京畿サイエンスパーク（中小企業総合支援センター）の韓理事長からも「サイエンスパークやインキュベーターを知らなかった私たちが今日あるのは、先行モデルのKSPがあったお陰です」と感謝の言葉を貰いました。

### 3. 工場誘致から自力創業へ増えるインキュベーター

第二に、中国瀋陽での第四回大会のメインテーマになった「新世紀の希望を孵化（インキュベーター）しよう！」が象徴しているように、これまでアジア諸国が力を入れてきた先進国からのハイテク企業の誘致だけでなく、自力でベンチャー企業を生み育てようとする機運が高まってきています。このため各地でインキュベーターづくりが急速に進んでおり、台湾、韓国が先行していましたが、中国が急速に追い上げ、すでに五〇〇ヶ所近く開設しており、日本を上回りアメリカに次ぐまでになっています。中国の高技術産業開発区と交流を始めた当初は、日本からのハイテク企業の誘致斡旋の要望が多く、サイエンスパークやインキュベーターについての認識も不十分で、何のためのサイエンスパーク建設なのか、なかなか問題意識がかみ合わず、苦い思いをしたが、その頃にくらべるとここ数年で急速な変化が進んでいます。

第四回の会場になった瀋陽高技術産業開発区の二階建て「二一世紀ビル」には、一〇〇室をもつ中国初の本格的インキュベーターが開設されていますし、北京の清華大学サイエンスパークには一〇〇〇室のインキュベーターが開設されています。一〇余年前の中国にはインキュベーターという言葉さえなかったことを思うと、今昔の感に耐えません。

韓国でもテクノパーク建設と並行してインキュベーターが続々開設されており、九七年の経済危機の際、財閥企業などからリストラされた人たちを中心にベンチャー企業の創業熱が高まり、すでに一万社余りのベンチャー企業が生まれているようです。ドラッカー教授は「起業家精神の世界ナンバーワンは間違いなく韓国だ」と高く評価しています（P.F. ドラッカー「ネクスト・ソサエティ」ダイヤモンド社 〇二年）テグ・テクノパークの場合を見ても、過去三年間で二五〇社のベンチャー企業を立ち上げていますが、内五〇社が大学発ベンチャー（教授が社長二〇社、学生・院生が社長三〇社）で、すでに五社がKOSDAQに上場しています。

台湾でも新竹の科学工業園区が満杯になり、台南市に新たなサイエンスパークを建設し、〇〇年にオープンしています。インキュベーターも〇〇年三月までに全土で五五ヶ所稼働しており、年間五〇〇社を目標にベンチャー企業の育成が加速されています。

#### 4. 産業クラスター形成に発展

第三は、中国や韓国では個々のサイエンスパークの建設や充実に力を入れているだけでなく、これを拠点により広域的に研究開発地域と産業クラスターの形成を図る動きが強まっていることです。もともと中国の開発区は数十平方キロから一〇〇平方キロを越す広大な面積を占めており、これまでも私は「中国の開発区はサイエンスパークというよりサイエンスシテイに近い」と考えていました。

一例として、北京の西北に形成されている「中関村（ちゅうかんそん）サイエンスパーク」を見ると、センター地区八〇平方キロ、開発地域三〇〇平方キロ（筑波研究学園都市が三六〇平方キロ）という広大な地域に、三九の大学、二一三の研究所、一万一〇〇〇のハイテク企業、一五〇〇の外国企業が集積し、三八万人の研究者・技術者が働いています（神奈川県は全県で三四・三万人）。学生総数四〇万、毎年の卒業生一〇万とされています。瀋陽高技術産業開発区も〇二年に一四〇平方キロに拡大している（渾南新区）が、これは川崎市の面積に匹敵する規模です。

韓国も、テグ・テクノパークが代表例ですが、「π（パイ）プラン」や「S字ベルト構想」など、テグ・テクノパークをハブにした IT 時代の都市計画や、洛東江（ラクトンガン）沿いの六つのテクノパークを IT、バイオ、素材、機械などの特色をもったものにし、テグ・テクノパークをハブとするネットワークと、これを中軸とするハイテク産業のクラスター形成を進め、ソウル首都圏に偏り過ぎている産業、経済の重心を分散させようとしています。

#### 5. 明確な「科学教育立国」の戦略

第四は、知識経済時代や IT 革命時代に備えた課題認識が、かなり明確なことです。中国はいま「世界の工場」と言われていますが、同時並行して「科教興国」（科学・教育立国）の国家戦略に沿って大規模な教育改革を進め、とくに大学についてはすべての国立大学を法人化するとともに、二〇〇〇校にのぼる高等教育機関のうち一〇〇校を国際社会に通用する重点大学として強化する計画を進めています（九三年「教育改革と発展綱要」公布、九五年国立大学法人化、〇〇年重点大学一〇〇校決定）。

研究開発能力の強化と産学連携を促進するため、各大学ごとに「科技园」（サイエンスパーク）の整備・充実に力を入れており、北京大学、精華大学、上海交通大学、復旦大学、西安交通大学、東北大学、ハルビン工業大学など、中国のトップクラスの大学サイエンスパークを始め全国の主要大学に五八の科技园が創られ、大学発ベンチャー企業の育成が大規模に進められています。大学発ベンチャーは一万社を超えと言われており、大学は知識経済時代の産業発展をリードする役割を果たしています。たとえば、北京大学は有名な北大方正集团公司ほか、ハイテク企業中心に三〇近い関連企業を輩出しています。

また、各開発区や大学科技园には六〇以上の「海外学士創業園区」が整備され、研究開発環境はもとより、資金、住宅、教育環境など、帰国留学生の創業支援を手厚く行なっており、彼らが創立した企業は四〇〇〇社にのぼるそうです（朝日〇三．一．一〇）。

これは台湾の新竹科学工業園区でも同じで、帰国留学生や研究者のための瀟洒な住宅や、小学校から中国語、英語のバイリンガル教育を行なう教育施設などが整備されています。むしろ台湾モデルを中国が取り入れたとも言えるでしょう。また北京の中関村には、帰国した中国人研究者も含め中国の若い優秀な頭脳を活用するため各国から世界企業、とくに IT 関連企業（IBM、マイクロソフト、モトローラ、ノキア、松下、日立、東芝、ソニーなど）の研究開発拠点が続々と開設されており、「世界の研究開発センター」の様相を呈し始めています（改革開放いらい五〇万人の海外留学生が出たが、九九年から帰国者が増え一四万人が帰国した）（前掲紙）。

## 6. イノベーションシステムの構築へ

第五は、施設や制度の整備、充実と並んでイノベーションシステム構築への問題意識を持ってきていることです。先進国を中心に、経済成長や競争力強化にとってイノベーションが不可欠だとの認識が広がり、各国ともイノベーションシステムの構築を国家的な課題として取り組み始めています。

この問題意識は中国と韓国とくに中国でより鮮明で、八八年、国務院はハイテク産業育成をめざす「火炬（たいまつ）計画」を批准し、全国に「高技術産業開発区」を建設する方針を発表すると同時に、第一号として「北京市高技術産業開発試験区」を認定し、以後、全国主要都市に五三の高技術産業開発区を国家認定してきた。これが各地の地域イノベーション能力を高め、ベンチャー企業の輩出、研究開発能力の向上に大きな貢献を果たしています。

全体として、アジアでは多くの場合、国家戦略の一環として、国家主導ないし国家支援型のプロジェクトが多いという特徴があります。これに対して米欧の場合は大学や民間企業の役割とくに大学の役割がきわめて大きいのが特徴です。中国、韓国、台湾の場合も大学が中核的役割を果たしている点は、欧米型に近い。これに対して、日本はどちらかと言えばその中間的形態で、地方自治体が主導し、民間企業がこれに協力する形が多い。そして大学のコミットは一ここ数年かなり積極化してきているが一これらの国ぐにや地域のなかで、日本が最も立ち遅れている。残念ながら、大学が中核的役割を果たしているサイエンスパークは日本には一つもないのです。

これまで、アジアはサイエンスパーク活動で米欧に大きく立ち遅れてきましたが、ここ数年間に急ピッチで追い上げ始めています。残念ながら日本は米欧に差をつけられたうえ、アジアからも追い上げられて、しだいに先進性が薄れてきているのが現状です。七八年に長洲さんが提唱した「頭脳センター構想」が海外の自治体（独バーデンビュルテンベルグ州、米メリーランド州、韓国京畿道など）から高く評価され、八九年長洲さんの強力なリーダーシップで建設、オープンした「かながわサイエンスパーク」が九〇年代までアジア諸国はもとより欧米からも成功モデルと見なされていたことを思うと、複雑な想いに駆られます。

ともあれ、ノーベル賞のダブル受賞に見られる日本の高い科学技術力（スイスの IMD ランキングで世界二位）を、産業競争力（同世界三〇位）の強化に結びつけるためにも、今後数年のうちに、あと三〇〇程度のサイエンスパークとインキュベーターを創るぐらいの覚悟がないと、日本はアジアでもサイエンスパーク後進国になり、アジアの研究開発センターもやがて中国に移ってしまうおそれがあります。これが ASPA 会長を実質六年間務めてきた私の痛切な感想です。